

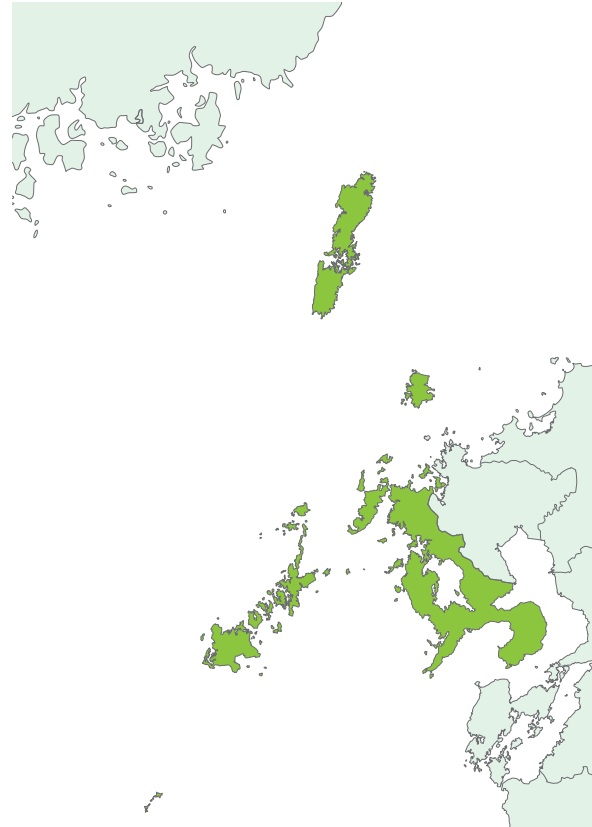
第 1 章

第1章

本県水産業を取り巻く環境、 水産業の概況

(1) 海況の特徴

本県は、九州の西北端に位置し、海岸線は、多くの半島、岬、湾、入江を形成し、変化に富んでいます。海岸線の長さは全国の約12%にあたる4,184 km^(※)に及び、北海道に次ぎ2番目の長さとなっています。この海岸線に面した広大な海域には、九州西方を北上する対馬暖流のほか、済州島方面からの黄海冷水、九州から沿岸水などが流入しているほか、多くの島々や複雑な海底地形により、好漁場が形成され、内湾から沖合までその漁場環境を活かした多種多様な漁業が営まれています。



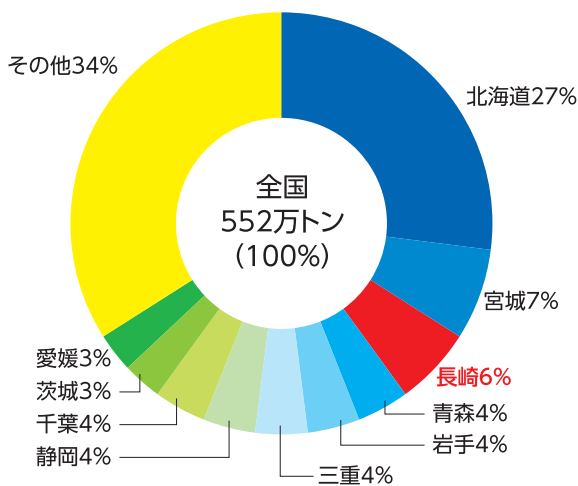
※海岸線延長／全国 = 35,275Km
うち長崎県 = 4,184Km (11.9%)
●海岸統計 平成21年度

(2) 本県水産業の地位

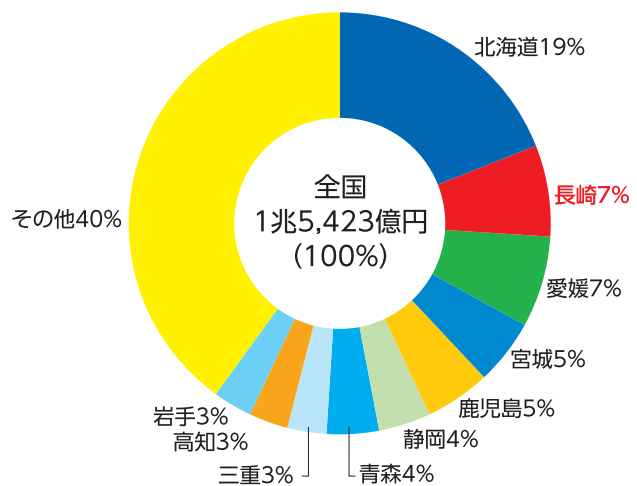
◎平成20年の海面漁業・養殖業生産量は、北海道、宮城県に次ぎ全国3位、生産額は、北海道に次いで全国2位となっています。

◎生産量(平成20年)が全国1位を誇る主要な魚種も数多くあります。

海面漁業・養殖業生産量



海面漁業・養殖業生産額



[長崎県の実産量・生産額] 平成20年／海面漁業・養殖業生産量=325,408トン
海面漁業・養殖業生産額=1,026億円

(資料:農林水産統計年報(農林水産省))

海面漁業

魚種名	生産量	全国シェア
アジ類 《マアジ、ムロアジ とも1位》	52,103トン	25.2%
クロマグロ	4,836トン	23.6%
タイ類 《マダイ、チダイ・キダイとも1位》	4,253トン	16.2%
イサキ	1,388トン	29.1%
アナゴ類	942トン	14.9%
アマダイ類	431トン	31.0%
サザエ	1,491トン	18.9%
イカ類 ※スルメイカ、アカイカを除く： 主にケンサキイカやアオリイカなど	6,446トン	13.4%

海面養殖業

魚種名	生産量	全国シェア
フグ類	2,496トン	60.3%
ブリ類 ※ブリやカンパチを除く： 主にヒラマサなど	2,302トン	40.2%
真珠	4,253 kg	35.9%

(資料：農林水産統計年報(農林水産省))



(3) 海面漁業・養殖業の生産量・生産額

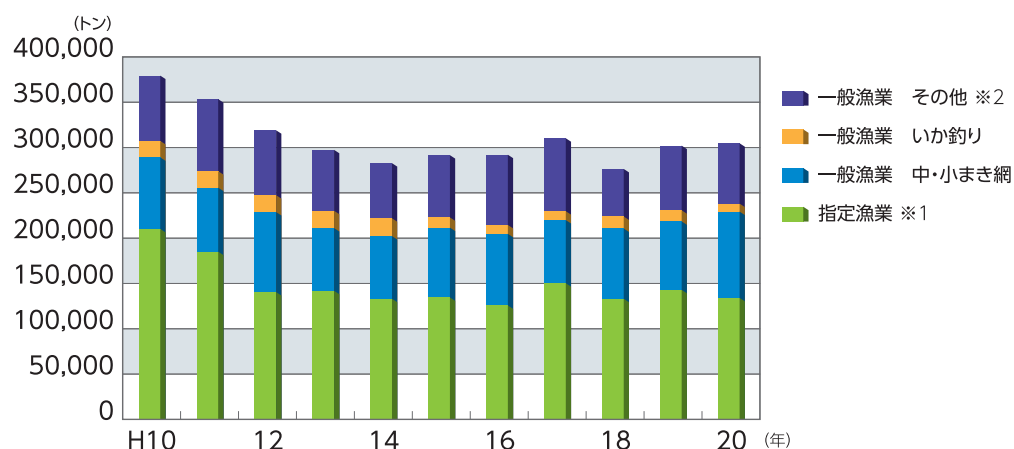
◎海面漁業の生産量及び生産額はともに横ばい傾向、海面養殖業の生産量及び生産額はともに減少傾向にあり、特に海面養殖業における生産額の減少が大きくなっています。

海面漁業

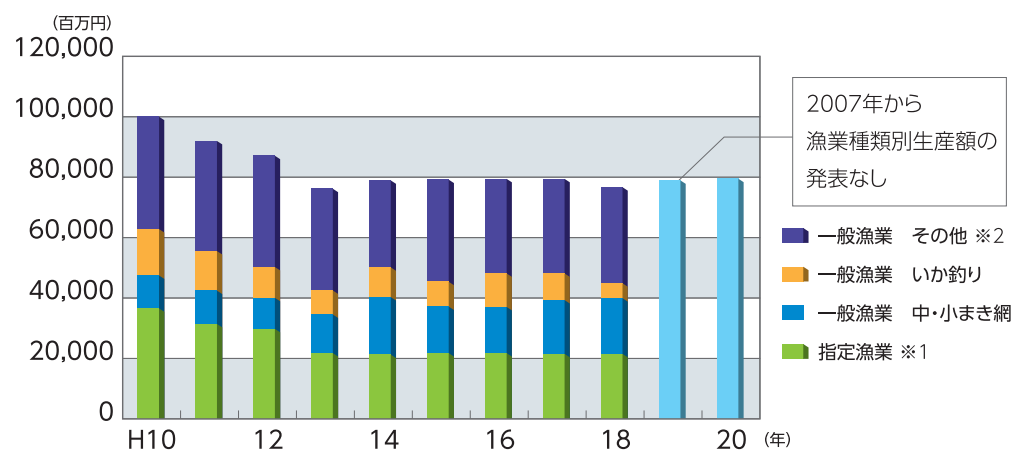
	H10	H20
生産量	382,641トン	302,844トン
生産額	1,022億円	779億円

●平成20年の海面漁業生産量は、平成10年と比較すると79%の水準に減少、生産額は76%の水準に減少していますが、平成13年度から横ばい傾向が続いています。

海面漁業 生産量の推移



海面漁業 生産額の推移



(資料:農林水産統計年報(農林水産省))

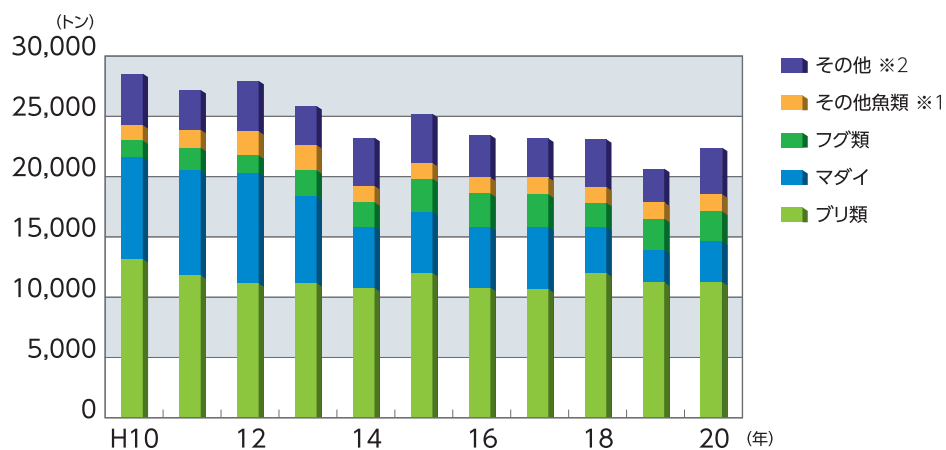
※1 指定漁業:漁業法に基づき、農林水産大臣の許可を受けて行う漁業で、政令で定められているもの。以西底びき網漁業や大中型まき網漁業など。
 ※2 一般漁業:「指定漁業」以外の漁業(自由漁業を含む)のことで、その他は定置網、小型底びき網、船びき網、はえ縄、ひき縄、一本釣りなどの漁業。

海面養殖業

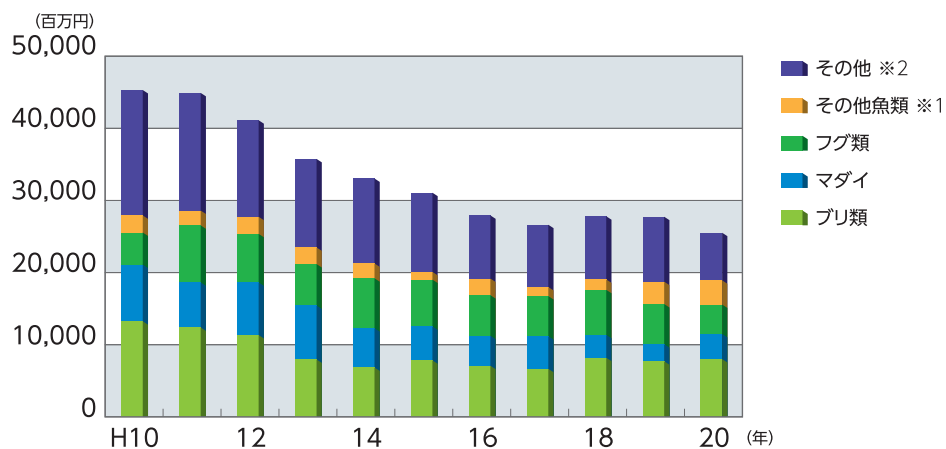
	H10	→	H20
生産量	29,768トン		22,563トン
生産額	455億円		247億円

●また、平成20年の海面養殖業生産量は、平成10年と比較すると76%の水準に、生産額は54%の水準に減少しており、特に生産額の減少が大きくなっています。

海面養殖業
生産量の推移



海面養殖業
生産額の推移



(資料:農林水産統計年報(農林水産省))

※1 その他魚類:マアジ、シマアジ、ヒラメ、クロマグロなど。
 ※2 その他:カキ類、クルマエビ、ワカメ類、ノリ類、真珠など。

(4) 水産資源の状況

- ◎国による評価が行われている本県周辺海域の水産資源のうち、約6割が低位水準にあり、7割近くが横ばい、または減少傾向となっています。
- ◎主な魚種では、マサバは低位・増加、マアジは中位・減少、カタクチイワシは中位・増加、スルメイカは秋季発生群が高位・増加、冬季発生群が中位・横ばいとなっています。

- 国が資源評価を行っている本県周辺海域の魚種は25種、26系群あります。
- 資源水準は、サワラおよびスルメイカ(秋季発生群)の2種、2系群が高位、マアジ、ヒラメなど8種、8系群が中位、マサバ、トラフグなど16種、16系群が低位となっています。
- 資源動向については、マダイ、ブリなど8種、8系群が増加傾向、スルメイカ、ヒラメなど13種、14系群が横ばい、マアジ、トラフグなど4種、4系群が減少傾向となっています。

資源水準 ※1	資源動向 ※2		
	増加	横ばい	減少
高位	サワラ	スルメイカ(秋季発生群)	
中位	カタクチイワシ、 ブリ、 マダイ	キダイ、 ヒラメ、 スルメイカ(冬季発生群)	マアジ、 ゴマサバ
低位	マイワシ、 マサバ、 ムロアジ、 東シナ海底魚類(ハモ)	ウルメイワシ、 アマダイ類、 タチウオ、 ケンサキイカ、 ヤリイカ、 東シナ海底魚類 ※3 (シログチ、エソ類、 マナガツオ類、 カレイ類)	トラフグ、 ウマヅラハギ

(資料:平成21年度我が国周辺水域の資源評価(水産庁))

※1 資源水準:過去20年以上にわたる資源量(漁獲量)の推移から「高位、中位、低位」に区分

※2 資源動向:資源量や漁獲量の過去5年間の推移から「増加、横ばい、減少」に区分

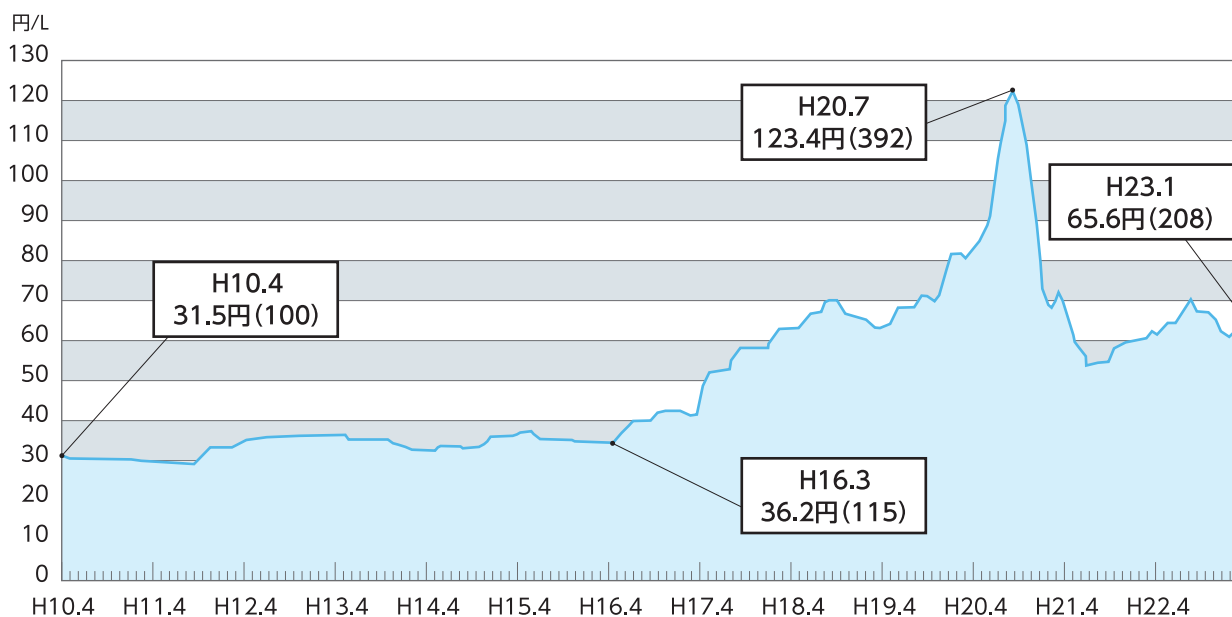
※3 東シナ海底魚類のうちキグチは、資源水準は低位、資源動向は不明

(5) 経営体を取り巻く環境(操業コストと魚の単価)

- ◎漁業・養殖業の経営は、燃油や餌料等の価格変動に影響されやすく、燃油、餌料ともに上昇傾向に直面しています。
- ◎一方、魚種別の単価は海面漁業・養殖のどちらも横ばい、または下落傾向にあり、経営は厳しい状況にあります。

- 平成23年1月のバージ(50kL)長崎渡し価格(消費税込み)は、65.6円/Lで、平成10年4月の価格31.5円/Lの 2.08倍となっています。ピーク時の価格123.4円/L(平成20年7月)からは下がっているものの、平成21年5月から上昇傾向にあります。

A重油価格の推移

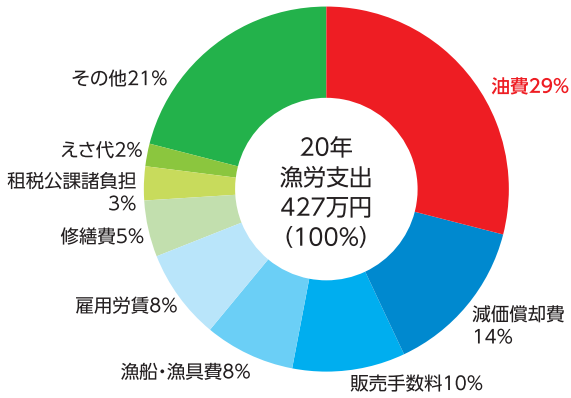


※:バージ(50kL)長崎渡し価格(消費税込み) ()の数字は、平成10年4月の価格を100とした場合の値

(資料:「積算資料」(財)経済調査会)

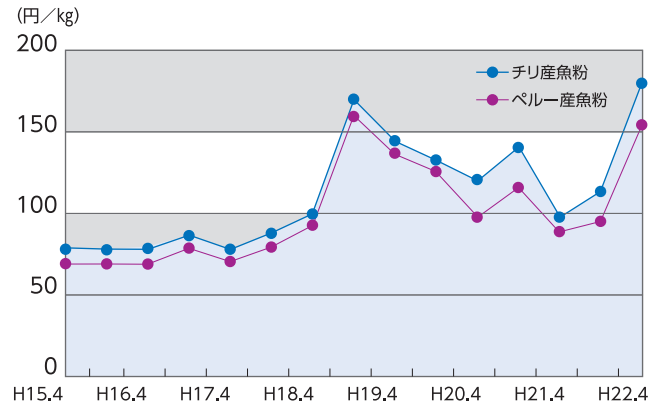
- 燃油は漁労支出の約3割を占め、燃油価格の高騰は漁業者の収益に大きな影響があります。養殖用飼料の原料となる魚粉価格は、上昇傾向にあります。

個人経営体漁船漁業(東シナ海区平均)



(資料:平成20年漁業経営調査報告(農林水産省))

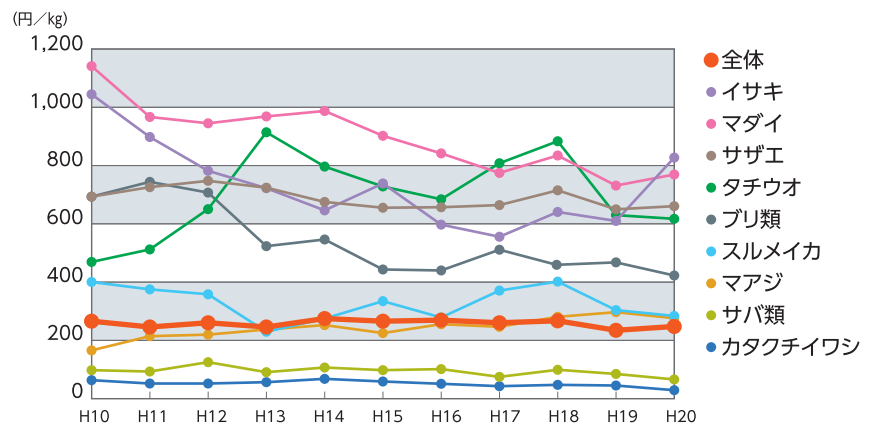
輸入魚粉単価の推移



(資料:貿易統計(財務省))

- 海面漁業における主要魚種別の単価は、マアジやタチウオのように上昇しているものもありますが、ほとんどの魚種が横ばいまたは下落傾向にあります。

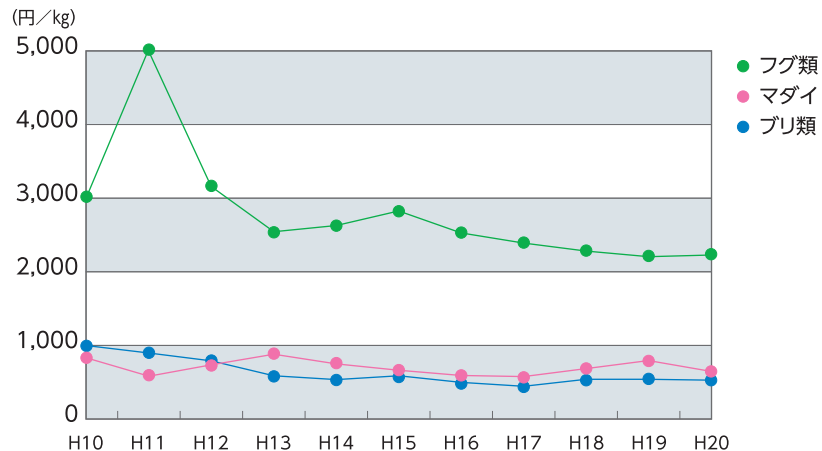
海面漁業 主要魚種単価の推移



(資料:農林水産統計年報(農林水産省))

- 養殖の主要魚種の単価も下落傾向にあります。

養殖 主要魚種単価の推移



(資料:農林水産統計年報(農林水産省))

(6) 漁業就業者数、経営体数

◎平成20年における漁業経営体数は、北海道に次いで全国第2位となっています。

◎平成20年における漁業就業者数は北海道に次いで全国2位、
人口千人当たりの漁業就業者数は全国1位となっています。

◎しかし、漁業就業者数、経営体数はともに減少しており、高齢化も進んでいます。

漁業経営体数(海面漁業・養殖業)

順位	都道府県名	漁業経営体数
	全国	115,196
1	北海道	14,780
2	長崎県	8,849
3	岩手県	5,313
4	三重県	5,155
5	青森県	5,146

(資料:2008年漁業センサス(農林水産省))

漁業就業者数

順位	都道府県名	漁業就業者数
	全国	221,908人
1	北海道	33,568人
2	長崎県	17,466人
3	青森県	11,468人
4	岩手県	9,948人
5	三重県	9,947人

(資料:2008年漁業センサス(農林水産省))

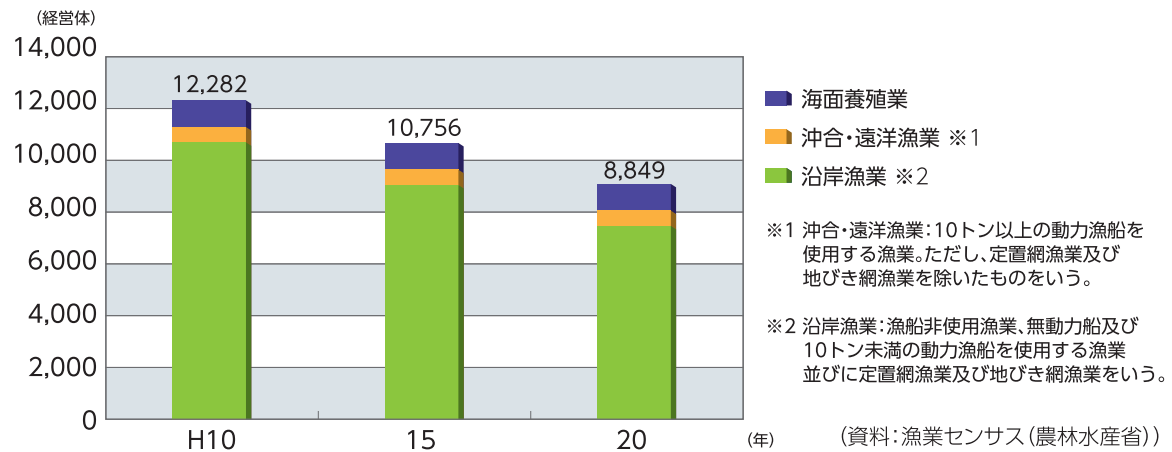
人口千人当たりの漁業就業者数

順位	都道府県名	人口千人当たり
	全国	1.74人
1	長崎県	12.13人
2	青森県	8.24人
3	岩手県	7.36人
4	高知県	6.34人
5	愛媛県	6.32人

(資料:2008年漁業センサス(農林水産省)、平成20年推計人口年報(総務省))

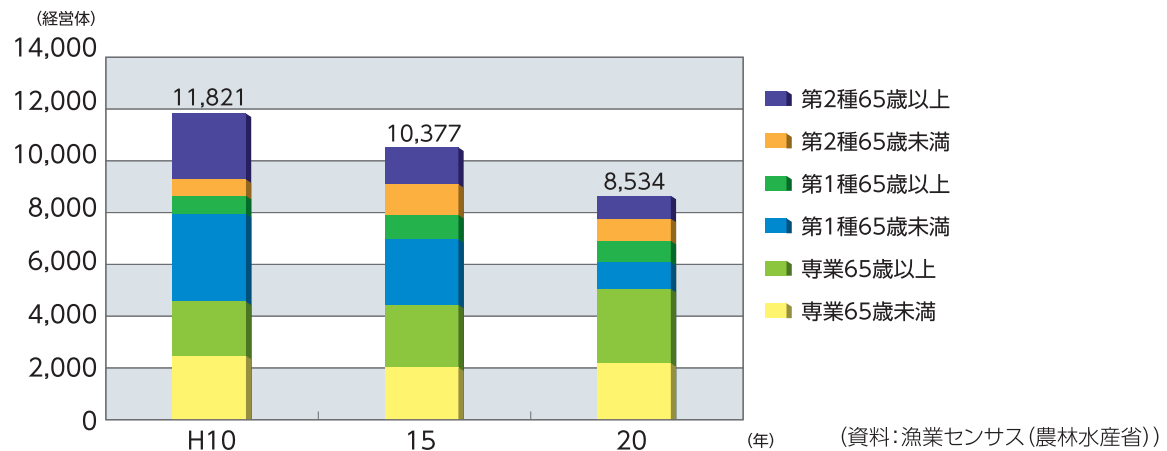
●漁業経営体数は、平成20年は8,849経営体と平成10年の12,282経営体の72%となっています。

漁業経営体数



●個人経営体は平成20年で8,534経営体と平成10年の72%となっています。しかしながら、
 専業65歳未満は平成20年で2,448経営体と平成10年の95%で減少幅は小さい状況です。

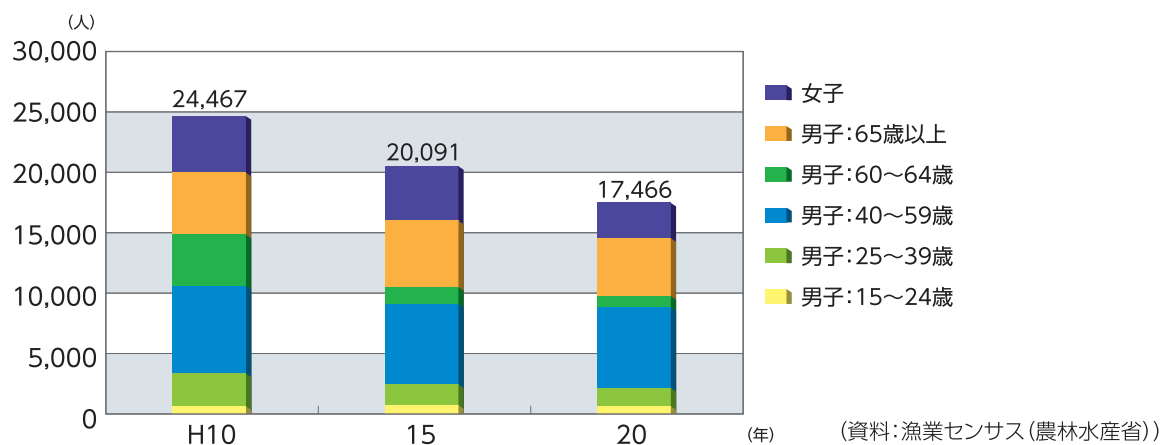
個人漁業経営体の専兼業別、基幹的漁業従事者の男子年齢別経営体数



●漁業就業者数は、平成20年は17,466人と平成10年の24,467人の71%となっています。

●男子就業者のうち65歳以上の割合は、平成10年の26%から平成20年には33%となり、
 高齢化が進んでいます。

漁業就業者数の推移



(7) 水産加工品の生産量等

◎水産加工業は小規模な加工業者が多く、生産量は減少傾向にあり、高次加工品の生産は少ない状況です。

- 水産食料品製造業1事業所あたりの従業者数、1事業所あたりの出荷額は、いずれも全国平均を下回っています。
- また、従業者1人あたりの出荷額も全国平均を下回っています。

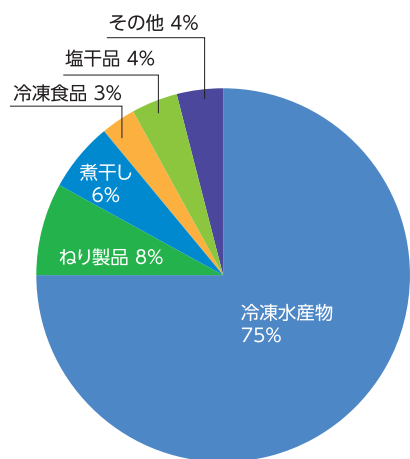
水産食料品製造業の事業所数、従業者数及び出荷額(従業員4人以上の事業所)

区 分	全国	長崎県	長崎県／全国	
事業所数	7,392	281	3.8%	全国シェア
従業者数	173,036	4,604	2.7%	
出荷額(億円)	33,978	552	1.6%	
1事業所あたり従業者数 (人／事業所)	23.4	16.3	70.0%	対全国比
1事業所あたり出荷額 (万円／事業所)	45,966	19,634	42.7%	
従業者1人あたり出荷額 (万円／人)	1,964	1,118	61.0%	

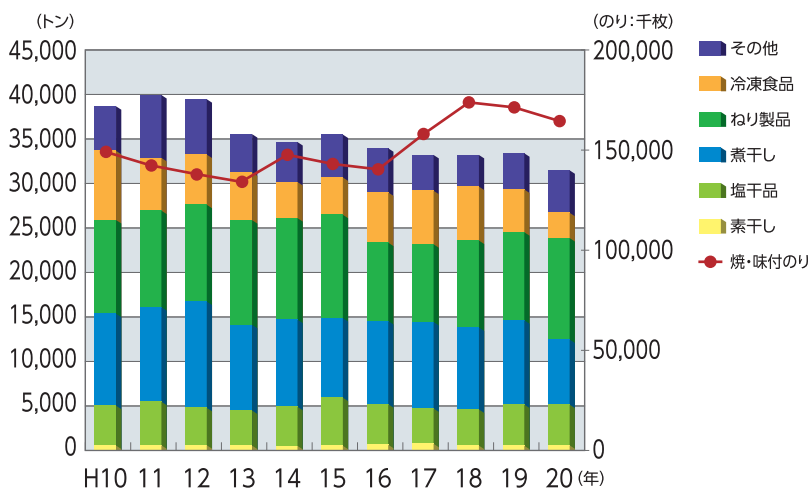
(資料:平成20年工業統計(経済産業省)、平成20年長崎県の工業(長崎県)より作成)

- 水産加工業の生産量は、冷凍水産物が75%を占め、これを除いた生産量は減少傾向にあります。

主な水産加工品の生産量の割合(平成20年)



食用水産加工品の推移(冷凍水産物を除く)



(資料:水産物流通統計年報(農林水産省))

- 生産量が全国上位にある加工品は、冷凍水産物(全国6位)や素干し(全国6位)など簡易な加工品で、高次加工品の生産は少ない状況です。

水産加工品生産状況(平成20年)

	生産量(トン)		長崎県/全国	順位
	全国	長崎県		
かまぼこ類	516,723	9,863	1.7%	18
冷凍食品	333,414	4,298	1.3%	19
素干し	22,032	456	2.1%	6
塩干品	211,426	4,731	2.2%	11
煮干し	71,240	7,154	10.0%	2
塩蔵品	190,124	878	0.5%	13
節製品	103,789	176	0.2%	18
その他食用加工品	427,895	3,726	0.9%	19
冷凍水産物	1,663,321	94,483	5.7%	6
焼・味付のり※	7,889,014	166,423	2.1%	15

※焼・味付のりの単位は1,000枚

(資料:水産物流通統計年報(農林水産省))

- かまぼこ類及び塩干品の平成10年から平成20年にかけての生産量の変化を見ると、全国では減少しているのに対し、本県では増加となっています。

かまぼこ類及び塩干品の生産量の変化

(単位:トン)

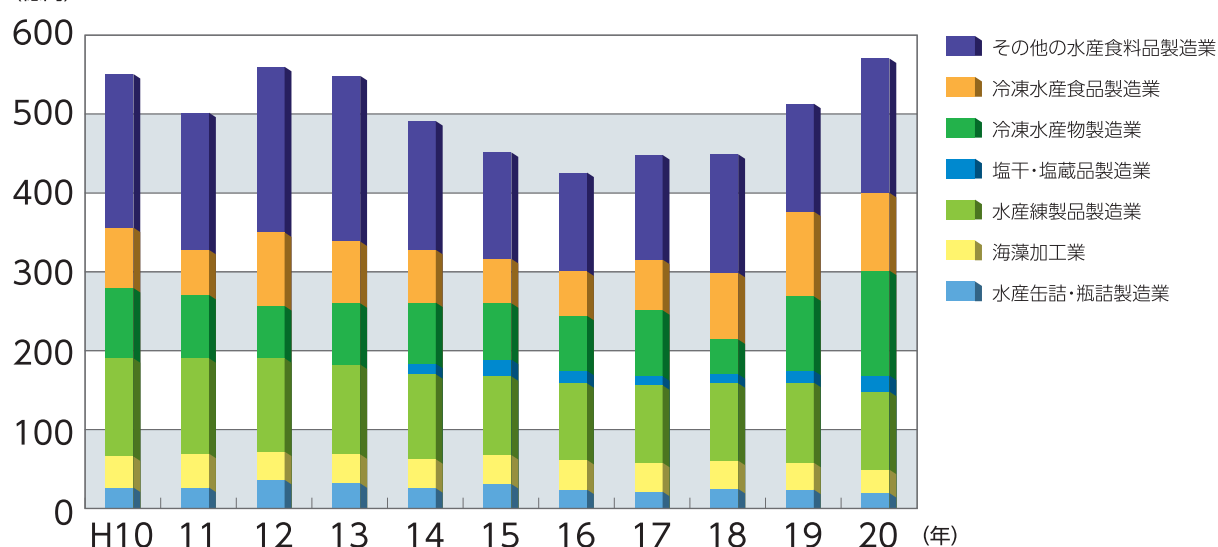
	品目	H10	H20	H20/H10
全 国	かまぼこ類	527,577	516,723	98%
	塩干品	260,167	211,426	81%
長崎県	かまぼこ類	9,494	9,863	104%
	塩干品	4,483	4,731	106%

(資料:水産物流通統計年報(農林水産省))

- 水産食料品の製造出荷額は、平成16年から増加傾向にありますが、これは冷凍水産物の増加が大きく影響しています。

水産食料品の製造品出荷額

(億円)



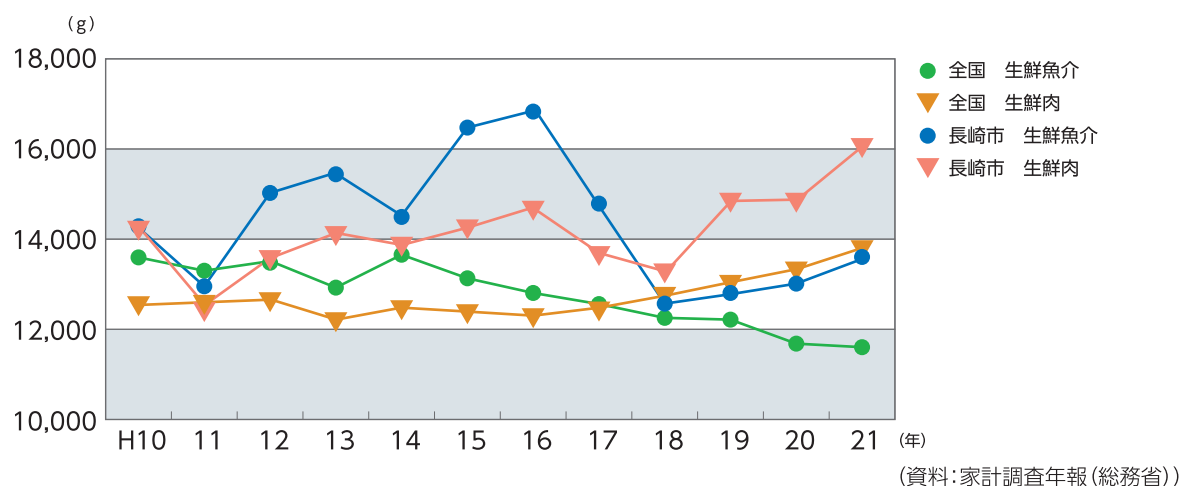
(資料:工業統計(経済産業省))

(8) 家計における魚の消費量

◎全国的に家庭における生鮮魚介の消費量が減少しており、「魚離れ」が進んでいます。

- 全国では、平成18年に生鮮魚介と生鮮肉の消費量が逆転し、その後も生鮮魚介は消費量が減少し続けています。
- 長崎市では、平成11年から平成16年で生鮮魚介の消費量は伸びたものの、その後急落し、平成18年に生鮮肉の消費量の方が上回っています。
- その後生鮮魚介の消費量は増加しているものの、生鮮肉の増加には追いつかない状況です。

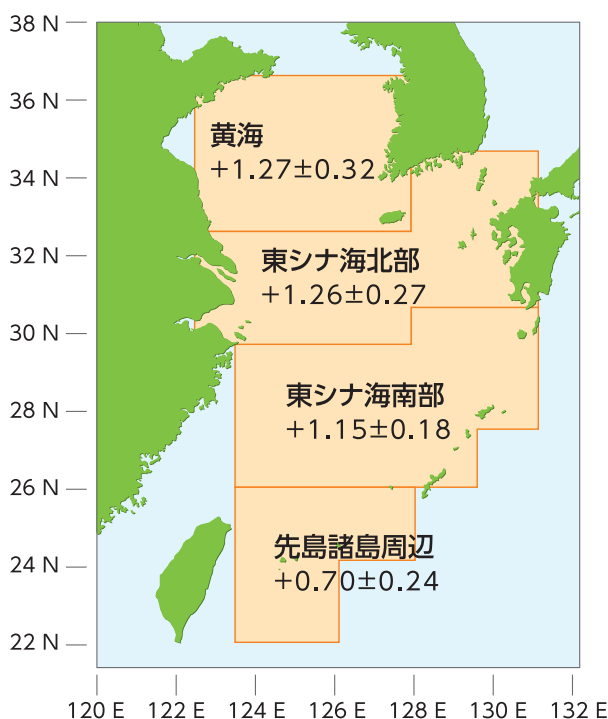
1人／年の家計消費量



(9) 漁場環境の変化

◎海域平均海面水温が上昇しています。

九州・沖縄海域における海域平均海面水温の上昇率

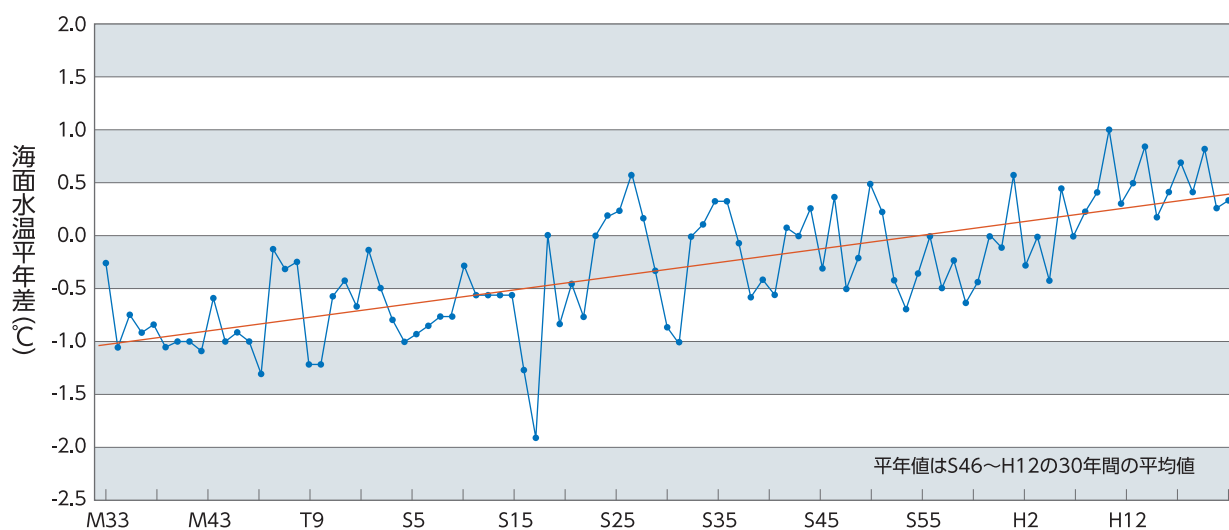


数値は海面水温上昇率(°C/100年)

(資料:海面水温の長期変化傾向(気象庁ホームページ)を改編)

- 東シナ海北部海域における、平成21年までのおよそ100年間の海域平均海面水温(年平均)の上昇率は、+1.3°C/100年です。この上昇率は、世界全体の平均海面水温の上昇率(+0.5°C/100年)の2倍以上も大きな値です。
- 特に、平成10年からは平年(昭和46年～平成12年の30年間の平均値)より高めに推移しており、県内の各海域においても同様の傾向にあります。
- 沿岸部では、魚介類が産卵したり、幼稚魚の時期を過ごす場として重要な藻場が減少・消滅する、いわゆる「磯焼け」が見られており、これは近年の海水温上昇に伴う海藻を食べる魚介類(植食性魚介類)の活動の活発化及び長期化が影響していると考えられます。
- 一方、これまで見られなかった南方系のホンダワラ類やアントクメ(アラメやコンブの仲間)が、最近、県内各地で見られるようになっています。

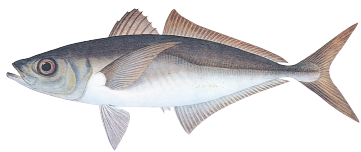
海面水温の長期変化傾向(東シナ海北部)



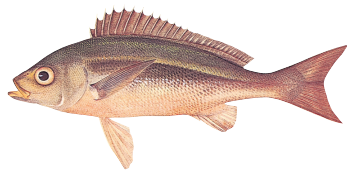
(資料:気象庁ホームページのデータより作成)

長崎県のさかな

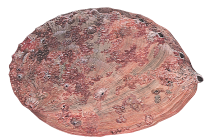
夏



アジ



イサキ



アワビ

◎アワビ以外の魚の図柄はシーボルト「日本動物誌」・
「グラバー図譜」(長崎大学附属図書館所蔵)
より転写したものです。
